

価な交通手段を使用して来たとしても、最終的決算としては安くあがる事になる。

日本でも年末に軒並み演奏されるベートーヴェンの第九交響曲のソロパートに関してだけは同様のシステムが出来上がっている。

アメリカでは普通「カバー」というシステムがとられる。これは重要な役を受け持つ歌手がキャンセルした場合はもちろんのこと、公演中に突然起こるかも知れない不慮の事態までを予想して準備されるものである。劇場とカバー契約をした歌手は公演が無事終了するまでカバーすべき歌手と全く同じ衣裳を着け、化粧を施されて楽屋やホテルの部屋などで待機していなければならない。待機中はテレビを見ようが何をしても構わないが、いざという時にはただちにステージに上がれるだけの度胸が必要である。結局は出番の回ってこない可能性の方が大きい「カバー契約」の報酬は、存外悪くないそうである。大劇場でのプレミエのような重要な公演では第一、第二、第三カバーぐらいいまでひとつの役に対して準備される事もあるという。

歌劇とは何と大がかりで贅沢な、金のかかる芸術であろうか。

奈落の底から

欧米の劇場のステージを客席より注意深く観察すると、ステージ手前の中央で、床がポコンと盛り上がっている場所がある。ここは別に照明器具などが配置されている場所ではなく、プロンプターという役割の間が入る「プロンプターボックス」である。

このボックスからステージにいる歌手や俳優に様々な合図が送られるのだが、演劇の場合にはプロンプタ

ーのストレスもそれ程大きくはない。俳優の台詞が多少遅れたとしても、大勢には何の影響もないからである。

しかしオペラとなると状況が異なる。音楽は待たなしでどんどん進行しており、歌手の一秒のとまどいですら命取りになりかねない。テンポの速いアンサンブル、たとえばフィナーレのシーンなどで、ある歌手が出遅れ、そのために全部のパートがばらばらになってしまい、オーケストラともまったく合わなくなる。などという不祥事を未然に防ぎ、もし起きてしまった場合には收拾をその場でつける、という責任ある大役をこなしているのがプロンプターである。

「プロンプター」は英語だが、ドイツ語では「フォアザーガー」あるいはフランス語をそのまま流用して「スフレア」と呼ばれる。これは今日に至る舞台芸術の歴史の中、イタリアで一番発達した職業である。劇場で行われる公演になくはならない役割のひとつとして重視され、「マエストロ・スジェリトール」または「マエストロ・ラメントール」と呼ばれる、オーケストラの指揮者と同格の職である。

この職業、ドイツ語圏の劇場では長い間軽視され続けてきた。声を潰してしまつた座つきの歌手や踊れなくなったダンサーに、劇場主が最後の哀れみと慈悲とをほどこしてやるための、言わば窓際族に残された閑職ポストでしかなかったのである。ようやくここ数十年、歌手達が劇場から劇場へとゲスト出演するのが当たり前になった頃からこの傾向が変わってきたが、それでも同圏内の劇場のプロンプターボックスは、決して居住性良く、仕事をしやすいように作られていない。

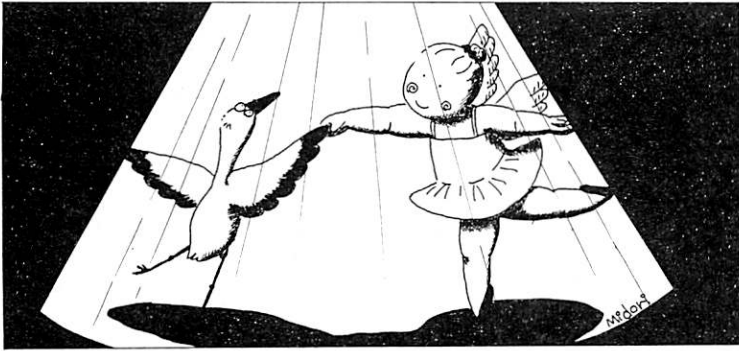
ウィーン国立歌劇場の場合にはオーケストラピットの後方、コントラバスのすぐ後ろの黒いカーテンの陰にプロンプターボックスへ通じる入口が隠されている。たまたみ半畳程のスペースに上下調節できるビニール張りの椅子が一脚、その前に譜面台、その両脇に指揮者を見られる小さなモニターテレビとバックステージに通じる電話、各種のスイッチ、それに光量を調節できる小さなスタンドふたつ（ひとつは楽譜、もうひとつ

つはプロンプターの顔を照らして歌手から見えるようにする)が配置されている。ボックス上部にあるステージへの開口部は横一メートル弱、高さ三十センチ程しかない。頭髮が天井に触れるぐらいに椅子の高さを調節して座ると、目の前、鼻の先からステージのフロアーが広がる。歌手達からはプロンプターの顔と手しか見えない。それでもウィーンのはドイツ語圏内で「まだましなレベル」の方である。

これに対してイタリア、たとえばミラノのスカラ座などのボックスはもつとずっと大きく、椅子も座り心地良く、歌手からはプロンプターの胸以上が見えるようになってきている。プロンプターのポジションも、あごを突き出し気味にして両掌を頭の高さまで上げなければ合図できないウィーンのものに比較して、もつと自然に座りながらの指示が可能である。ワグナーなど数時間はゆうにかかる公演になると、この差は歴然としてくる。体力的にも決して楽な職業ではないし、ステージで舞い上がる埃やゴミが呼吸器官や目の負担もなろう、という不健康な職種でもある。

公演中に不祥事を起こすのは何も歌手ばかりではなく、オーケストラ団員のぼんやり、また指揮者のうっかり、など原因はさまざまである。公演中の音楽的アクセントは交通事故と同じで「こうなったらこうすれば良い」と前もって準備できるものではなく、その場その場が新しいシチュエーションである。運転中の車の前方に突然人が飛び出してきた際に「ここはブレーキをかけるべきか、またはハンドルを切るべきか、その場合は右か左か」などと考えている暇はない。とっきの反射があるのみだ。オペラでも同様に、アクセントが起こった瞬間にプロンプターから「君はそのまま音を延ばして、一、二、三、はい、次のフレーズへ! あなたは待って、次の出の歌詞は△×○、それをはい、ここで一緒に!」というような指示が顔の表情、目、声と唇の動き、そして手の動きで瞬時に明確に与えられる。

逆に言えば、オペラ歌手もプロンプターの誘導に従いながら歌う経験を積まないうちは半人前、というわけである。イタリア出身の歌手などにはプロンプターなしではとても歌えない、ひとりでは歌詞もリズム



もあやふやな剛の者もいる。

ソリスト達にこれだけの指示を与えるためにはそれまでの経験も大切といえ、まずは作品そのものを隅々まで熟知しなくてはならない。全てのパートのメロディーと歌詞を原語で覚えるぐらいは必要最少限の下準備である。歌手達が使用する、伴奏部分がピアノに編曲された楽譜（指揮者が使用するオーケストラのスコアは譜めくりの回数が多すぎる）に、特に間違えやすかったり、歌手にとって分かりにくい、従って必ず合図を送らなければならぬ場所を書き込んでおく。この楽譜は公演の際プロンプターボックスに持ち込まれるが、実際に楽譜を見ている暇はない。視線は常時歌手にむけられ、それがステージで歌う歌手の安心感にもつながるのだ。

送られる合図は何も難しい所とアクシデントが起こった時のみならず、歌手それぞれに全てのフレーズ冒頭の歌詞とそれを歌いだす場所が、前もって知らされる。歌詞は支障がない限り声に出して伝えられるが、この声が客席にまで聞こえないのは、プロンプターが伴奏の音量に自分の音量を合わせているからである。フルオーケストラが鳴っている伴奏部分などでは相当の大声を出さないと歌手に歌詞が届かないため、「通る声」もプロンプターに要求される条件のひとつである。歌手の声の音程が高すぎたり低すぎたりした時の修正指示もプロンプターから出される。

このように、客席からは全く見えない存在でありながら、プロンプターの果たす役割は指揮者と同等、あるいはそれ以上ともいえるだろう。

舞台装置の置き具合によっては、ステージ前面中央のプロンプターボックスが犠牲にされてしまう事も起り得る。このような場合でもプロンプターボックスはステージ横に、あるいは大道具のかけに、などいずれかの場所に移動され、プロンプターなしで公演が行われる事はない。最悪の場合でも舞台の袖からプロンプターの指示が送られる。しかし、このような不自然な場所に歌手にとって最大の支えであるプロンプターを追いやると、演技までが不自然になってしまうことが多い。なぜなら歌手の視線はプロンプターのもとに集まらざるを得ないからである。これが舞台中央の正規のプロンプターボックスの位置に集まるのであれば客席からは目立たないのだが…。

通常プロンプターがその管轄として誘導するのはソロ歌手の音楽的内容に関する事であり、ステージ上での動きと演技は舞台監督、コーラスはコーラス専門の指揮者が受け持っている。コーラス指揮者の存在も客席からは見えないが、舞台の袖、あるいは大道具のかけから懐中電灯を片手に指揮をしている「縁の下の力持ち」の一員である。

つけ加えておくと、ステージでのピストルの発砲音（これはその後しばらく耳がバカになってしまうので、できればやりたくないそうである）や教会の鐘の音などのスイッチ操作もプロンプターが受け持つ。ステージの上の物がひとりで動くトリックは、プロンプターがボックスより紐であやつっている事が多い。

プロンプターは幅広い音楽性と優れた音感を持ち、いろいろな外国語（ちなみにウィーン国立歌劇場一八九九年のシーズンでは、ドイツ語、イタリア語、フランス語の他にロシア語三本、チェコ語一本、そしてハンガリー語一本のオペラがレパートリーとなっている）を正しく発音し、確固としたオーソリティーを持って並み居る百戦錬磨の歌手達を誘導できなければならない。指揮者とのコンタクトも重要である。駆け出しのプロンプターはまず指揮者に試され、歌手達に試され…と、アーティストの信頼を得るまでが試練の道である。

音楽学校にオペラのプロンプターになるための学科やセミナーはない。劇場で実際の現場に触れながら経験を積んでいくしかない職業である。必ずしも指揮やピアノの技能を持っている必要はないが、優れた読譜力と共に、かなりの生まれ持った適性が要求される。現在ウィーン国立歌劇場は四人の専属プロンプターによってカバーされている。ザルツブルクの音楽祭にも出張したり、全世界の劇場から後進の育成を依頼されたり、と表に出る事こそ少ないが、大変なエリート職なのである。

棒振りとは苦勞人

数多くの音楽家の職業の中でも「指揮者」というのは大変見映えも良く、音楽にはふだんあまり関わりのない一般の人々にもアピールし、憧れのまとなる。何十人ものメンバーで編成されているオーケストラの前にし、白い指揮棒の先から、時には力強く、時には甘く訴えかけるように、美しい音楽をいともやすやすと織りなしていく姿は、確かにひとつのスター的存在である。そしてウィーンフィルやベルリンフィルのような一流オーケストラの定期演奏会のステージに立つことは、指揮の世界において極められる最高のステータスのひとつだろう。

最近では若い指揮者のための国際コンクールも各地で定期的に催されるようになった。これによって、若く才能ある新鋭達がデビュー一日目からコンダクターとしてステージに立てるチャンスが、比較的得やすくなった。一昔前はよほど恵まれた環境にいる数限られた人材以外にはなかなかそういった機会は与えられず、かなり長い期間の下積み経験を経て、初めて一人前と認められるのが普通であった。